

片岡良一

漱石と鷗外

漱石と鷗外

漱石と鷗外とを対比的に見る場合、彼等の出生や生立ちの相違がかなり重大な意味を持つものになっていることは、すでに中野重治も指摘している（『漱石と鷗外』とのちがい）。鷗外は津和野藩医の長男に生れた。旧い封建的な家族制度にあっては、いずれその家を背負うべく運命づけられていた長男というものが、それだけの意味をこめて大事に育てられたものであったらしい。時勢の変り目ではあり、早くからすぐれた才能を示していた鷗外の場合には、そ

の上になんかそういう条件から来る期待が加わったためであるうが、特に大事に、常に深い敬愛をこめて周囲のものから扱われていたのであった。それに対して、漱石はいわゆる「冷飯」の末っ子であつたばかりでなく、そうして末っ子——「両親の晩年になつて出来た」子供であつたために、母がその懐妊を面目ながつたあげく里子に出されたのを振出しとして、かなり不幸な生立ちを持ったのであつた。古道具屋の「我楽多と一所に、小さい笹の中に入れられて、毎晩四谷の大通りの夜店に曝されてゐた」とか、その後改めてやられた養家から歸つた時にも両親

は冷たかったとか——『坊つちやん』に書かれている下女の清がかげでひそかに同情していたというようなことも、事実あつたらしい。そういう育ちかたの相違が、その後の二人の物の感じ方や作品のあり方に、大きなかげを落さずにはいなかったのである。

と同時に、その後の閱歴がまたこの二作家の道に著しい対比を持たせるようになったことも、もう多くの人々によつていわれている。医学を学んだ鷗外が陸軍と結びついたことも、その陸軍の豊かな費用で留学したのがビスマルク治下の独逸であつたことも、それがまだ「処女

のやうな官能」と「嘗て挫折したことのない力を蓄えて
みた」二十三才の若い時代であつたことも、すべてが鷗
外の前途を即時代的な明るい希望に充ちたものとさせた
のであつた。そういう空気の中で、単に衛生学を学ぶ留
学生としてあつただけでなく、演説をしたりいろいろな
会合に出たり、かなりはなばなしい活動を示していた鷗
外は、やがて外交官として生きることが望むようにさえ
なつたという。『舞姫』の主人公太田豊太郎が天方伯の
秘書として有為な才能を示したとある辺りなどに、そう
いうことの仄かな反映も認められたのであつた。伊藤博

文等が独逸から帰って、そこの政治のあり方を直接わが国のその手本としたのであったことなども、後には高級官僚となつた鷗外のあり方と、結びつけて考えられていいのではないかと思う。それに対して、予備門在学中から月謝かせぎのアルバイトをしなければならなかつた漱石の、年齢的にも少し遅かつた洋行が、甚だしくみじめで冴えないものであつたことや、そのみじめさの中ではげしい勉強を続けたあげく、一応は自己本位の立場をつかみながら、結局は例のはげしい神経衰弱を抱いて帰らねばならぬことになつたのであることなどは、誰でも

知ってしる通りである。『道草』で見ると、彼は三流政治家の拭きこまれた玄関で見苦しく滑りかけたり、細君は細君で質屋などというものとも交渉を持つようになりたりしているのに対して、鷗外は、招待された展覧会場を間違えて他の場所に入ってしまったのを、その受けつけに咎められかけても、ただ一言、「森林太郎」ということだけで平気でそこを通り過ぎてしまったということ、小堀杏奴か誰かが書いていた。いろいろの点で、あまりにも対比的な二人であったことを思わずにはいられないわけだ。

そういう違いが、作家としての漱石には、当然抑圧されたものとしての暗さや苦悩の中から発想させている。

「愚なる教師とならんあら涼し」とか「その愚には及ぶべからず木瓜の花」とかいう作品にこじれた心境を示していた時代からそうだったし、低徊趣味や非人情をとこなえたのも、わずかにそういう立場を裏返して見せたに過ぎなかった。ましてその低徊趣味の一つの見本として提出した『坑夫』において、強く統一された生を生きることの出来ないものの不安に触れた後、その問題を推しつめて結局『門』に行かねばならなかった辺には、そのこ

とを強く感じさせるものがあるろう。三四郎はいろいろの理由から自我を生きそこねた。そのため積極的な生の熱意を失っていた代助は、三千代の登場によって新にされた私の自覚を、こんどは強く生きぬこうとして社会とはげしく触着した。その結果として社会の外に弾き出された宗助は、しがなく疲れた無感激の奥に、社会に対する深い怖れを感じながら生きているのである。それはいうまでもなく抑圧に抗しきれなかったものの敗北的な落ちこみ場所であった。低徊趣味や非人情主義の時代には、表面的な意味で反自然主義を立場としていた彼が、ここ

まで来て自然派の人々と同じ落ちこみ場所に落ちこんだことになるのであった。その後そういう怖れや不安の由来を探って我執の問題につき当った彼が、例の則天去私の救いを見出して行くようになったのも、自然派の、例えば田山花袋などが、やはり我執とか執着の心とかいうものを怖れて、宗教的な救いを求めて行ったのなどと、或る程度並行的な道筋でなかったとはいえない。抑圧と
いう外部からの問題をまで内部に移して考えずにはいられなかった——そういう形であらわれた探求力の限界がそこにあつたことになるのである。

漱石の非人情主義や低徊趣味と呼応するかのよう
に、いわゆる「あそび」の主張などを示して、同じように反
自然主義を立場としていた鷗外が、いかにも忠義な高級
官僚らしく、『かのように』や『藤棚』のような作品に
おいて、天皇制温存のための工夫を説いたあげく、「国
体に順応した集産主義」とか「天皇制社会主義」とか規
定される思想の方向に傾いて行った点からいえば、彼は
漱石よりずっとはつきりその頃の事態をつかんでいたの
であつたことを思わせる。が、そうして事態をはつきり
つかみながら上記のような方向に傾いたくらいだから、

抑圧下に疾苦するものの苦悩などには彼は何の共感も同情も示さなかった。その頃の現実を眺め渡そうとした作品『青年』における、酒井未亡人などの描き方がそれを端的に物語っている。疾苦するが故にともすれば頹廢などにも陥ろうとする人々を、冷ややかにただ醜い墮落だとかばかり考えた彼は、そういう崩れた醜さに対置されるものとして、『山椒太夫』の安寿の場合などに見られるような、清純な少女の一念凝った献身の美などを、彼としては珍らしくやや強調的な筆致で描いて見せたり、崩折れることを知らない昔の武士の意地強さを傾情的に描

いたりすることになったのである。それもむろん我執の克服に道を見出そうとした漱石の場合と並行的なもので、同じ時代の苦悩に対処して新しい生の道を探ろうとする立場が、ここまで来れば、はっきりと対立的なものになっていたばかりでなく、我執を恐れた彼と、意地を尊んだこれとが、そういう点からも対比的なものを示すようになったのであることが思われよう。出生や閱歴から来るものが、そういう対比をいわば決定的なものにしているのである。激すれば子供が大事にしていた植木鉢などを、縁側から蹴落したりしたというほど、容易に取

りみだす人であった漱石に対して、鷗外が決して取りみださぬ人であったことなども、恐らくここで関連的に考えられていいことであろうし、前者の文学が持ったはでなにぎやかさと、後者のそれが持った簡素で緊密な整いの問題なども、何かしらそこにつながるのがある事柄のように感じられる。

が、そんなことより、そうして意地強く生きぬくことを尊んだ鷗外は、そうした生にまつわる悲劇をも幾つかは見ていながら、結局は人生の明るい可能性を信じようとする人であった。だから彼は、マイレンデルやシヨウ

ペンハウエルには頭を振って、科学の未来を信じようとしたし、古人の営為にも高い意義と価値とを感じて、何千年もの間人間がそんなに不合理な生活を続けて来たはずがない、というようなことを書くようになっていた。それに対して、漱石もまた歴史を一応は発展においてつかんでいたらしく見えるけれど、ただその発展が他に勝とう凌ごうとする我執の集積としてのみあらわれるものであるため、そこに穏かな平和などあり得ないのだと感じて、著しく悲観的な否定観に傾いたあげく、例の則天去私を思う人となったのであった。尤も則天去私につい

ては、それがも一つつきぬけたら、もっと明るい肯定観が生れることになったのではないかと思われる節があるし、その意味での漱石はまだその道を歩みきれぬうちに死んでしまったことになるのだけれど、とにかくその相違が、『明暗』と『澁江抽斎』以下の史伝物との相違と違ってあらわれていたのではないかと思う。その意味で鷗外は漱石のように打砕かれなかった人だったのであり、漱石は打砕かれたところから立直りかけたところでのその生を終わった人だったということになる。そこにもまたその立場の相違が或る程度関係づけて考えられてよか

ったのではないかと思う。

にもかかわらず、鷗外の多くの作品にも底深い寂寥感が秘められているのは、すでに定評になっていることだし、『舞姫』の否定的浪漫主義から出発した彼の道が、多くの場合深い諦観と結びついたものであったことも、誰でも知っている。『梶原品』の中には、その境涯故に何事もし出かすことが出来なかった綱宗の無力さとそれ故の寂寥感が書きたかったとも語られている。そういう点では、『猫』や『虞美人草』以来常にその無力さを嘆かずにはいられなかった漱石の場合とも、或る程度通

い合うものがないこともなかったのである。操觚者となろうとして果さず、外交官への夢も実らず、科学からも閉め出されたことその他、いろいろな事由がむろん鷗外の場合にも考えられねばならぬけれど、根本的には民衆一般に明るい可能性を見出すことの出来なかった人々の不幸が、そこに同じように示されていたことになるのではないかと思う。それなりに、漱石にはかなり広い範囲の人々をも読者として考慮していたようなところがあったのに対して、鷗外には、少くとも晩年以外は、もっぱら高いところから彼等を見下しているようなところの多

かったのが、彼のすがたを一そう孤高の趣あるものとしたのであろう。

そういうことと関連して、漱石にはその周囲に直接の門流が多かったのに対して、鷗外にはそれがなかったことや、漱石の江戸時代芸術への親近とその意味での庶民性に対する鷗外の貴族性の問題、彼の俳諧に対するこれらの和歌、絵画的な多彩さと彫刻的な雅醇さの問題など、なおいろいろとここで触れるべき事柄は残されているけれど、もうその余白もない。生田長江の『最近の小説家』に、そういう点を主とした二人の比較論が収められてい

ることだけでも、せめて参考のためここに記しておくことにしよう。

(二十八年八月
『解釈と鑑賞』)

日本文学電子図書館

夏目漱石の作品

著 者：片岡良一

制作者：宮澤一郎

出版社：鷺の宮書店

昭和42年12月15日 印刷

昭和42年12月20日 発行

日本文学電子図書館